

サマー・ライフ

青森県八戸市立根城中学校

三年 松山 慎太郎

人との別れ。それは、受け入れ難い事実であった。僕は五歳から水泳に打ち込んでいる。そして、仲間と共に辛くて苦しい練習を耐えぬいてきた。しかし、ある後輩が突如として

「水泳をやめて、別の道へいく。」

と、僕に言った。

「冗談はよせよ。」

と、僕は言った。でも、彼の目は本気だった。生まれてこの方、縁を切ったことがない。しかも、あまりにも急すぎて、刺すような空虚さが全身を覆った。翌日、彼から一通の手紙を貰った。その内容は、『先輩は僕の憧れでした。最後の中体連頑張って下さい。いつまでもお元気で。』というものであった。もう、あいつに会えないのかと思うと涙をこらえきれなくなる。僕は落ち込んだ気持ちのまま練習を続けた。

後輩と別れてから二カ月。

僕は、八戸市予選会を勝ち抜き、県大会へと突入した。そして当日。会場には、予選を勝ち抜いてきた兵たちが続々と集まってきていた。その中からこちらを見ているものがあった。

「ウィッス！」

と言いながら来る。顔は覚えているが名前と一致し

ない。

「俺だよ。俺。」

やっと思い出した。たしかあいつは、昨年の県大会のとき、百メートルのフリーで僕を破って優勝した選手だ。この、いつもにっこりしている顔が曲者だ。

「今回も優勝しちゃうの?」

彼に合わせて軽い気持ちで言った。

「う〜ん。分つかんない! みんな速いんだもの。」

よく言うぜ。

開会式も終わり、もうそろそろ出番がくる。

招集所では、彼が先に待っていた。僕は、

「先に来てたのか。」

と言った。彼はにこやかにしていたが、目は笑っていないかった。

「期待してるぞ。」

と八戸地区の友達が僕に言う。

「よし!」

絶対勝つ。覚悟を決めた以上、あとは全力で泳ぐのみである。長いホイッスルに促され、スターティングブロックに上がった。体の重心に気持ちを集めてゆく。それをグッと押し下げ、足全体に体重を感じながらスタートの体勢を取り、指先をスタート台の端に掛ける。

「Take your marks!」

いつでも動き出せる体勢を作り、全身を耳にして待つ。――スタート。

頭で考えるよりも先に体が反応した。仲間の声がある。誰よりも遠くに着水し、ストリームラインの体勢を整えていく。水がグイグイ僕を求めてくる。ドルフィンキックから浮上して、ストロークの開始。わずかに僕が前に出た。しかし、あいつの持ち味はここからだ。グイグイ追い上げてきた。

――感じる。

肌がビリビリするほどあいつの気配を感じる。僕がおくれてターンをする。一瞬、目が合った。そのままの間隔で残り二十五メートルの線が下に見えた。また、負けるのか。三年間、結局勝てなかったじゃないか。と、思う。そのとき、水泳をやめた後輩の言葉が頭を横切った。

『僕の憧れでした。』

こんなさまで本当に憧れてくれるのか。憧れ、あこがれ、アコガレー。いや、こいつに勝たなきゃ、あのやめた後輩も他の後輩も誰も僕に憧れてくれない。だからこそ……。絶対に負けられない。

熱い炎に包まれた全身が、青白い光を放つ。やがて、途方もないエネルギーとなって、水の中の自分を突き動かした。

ゴールに手が触れ、ゴーグルを外す。顔を見上げて、表示板を見る。『男子フリー百メートル』のすぐ下に、自分の名前があった。

「か、勝った。」

全ての声援が僕のためのもののように思えた。上位三着は表彰台に登る。三位、二位と呼ばれていく。

「第一位。」

きた。一番高い所に登る。賞状を貰い、空を見上げる。あの後輩の顔が浮かんだ。

――おまえがいなければ一位になれなかったよ。

仲間全員が喜んで僕を迎えた。

「後は頼んだぞ。」

こうして僕の夏は幕を閉じた。